

訓令式・ヘボン式ローマ字教育の功罪

箕原辰夫*1

Email: minohara@cuc.ac.jp

*1: 千葉商科大学政策情報学部

◎Key Words ローマ字, ヘボン式, 訓令式

1. はじめに

日本で使われているローマ字⁽¹⁾については、文部科学省は訓令式⁽²⁾のローマ字を基本として、日本語の英字表記の教育を進めてきた。しかしながら、パスポートや英語教育においては、ヘボン式⁽³⁾のローマ字表記が基本になっている。海外、特に英語圏での日本語の表記については、ヘボン式の方が、より日本語の音に近い形で表記することができる。ただし、日本語のローマ字表記は、その名の示す通りに基本的にはラテン語の読み方に近い表記になっているため、英語を母語とする人が読むと英語読みになってしまうという問題点もある。一方、訓令式のローマ字表記の場合は、ローマ字を用いている国では日本語の音がほとんど正確に読めない表記 (ti, tu などタ行の音) も含まれている。もちろん、訓令式は形態素解析を伴う文法の説明などには有効なため、基礎教育で使われているのだろう。そのような歴史を踏まえ、この論文では基本的には、ヘボン式ローマ字を推奨するという立場で、ローマ字教育で使うべき表記方法について論じていく。

2. ローマ字表記をどこで使うのか

一般的には、ローマ字論者が提唱してきたような、日本語の国字をローマ字にするという主張は受け入れられていない。ここではそのような局面は除外するものとする。それ以外の局面において日本語をローマ字で表記する必要がある場面として以下のような用途を想定する。

- ・ 海外に行った際に、日本人あるいは日本の地名、日本の文化などを紹介する場面
- ・ 海外から日本に来た人に、日本の地名・駅名などの名称を読んでもらう場面
- ・ 形態素解析において、日本語で書かれた文を解析する場面
- ・ ローマ字かな変換を行なう場面

海外での日本人の紹介には、もちろん、パスポートなどでの入国など、行動の主体者自身をも含むものとする。形態素解析を除けば、海外との交流において必要とされるのであり、そこでのローマ字表記をどのような目的で行なうかについては、自ずと限定される。すなわち、海外に行った先においては、なるべく日本語で発音されている音韻に近い形で読み取ってもらうの

が主たる目的になる。また、海外から日本に来た人には、最大公約数的な形で英語の書法を用いて、日本人にも通じるような発音ができるような形で名称を読んでもらうことに、主たる目的がある。

2.1 海外との交流のためのローマ字表記

海外との交流の目的のために必要とされる場合、ラテン文字が使われているその国の表記にそって日本の名称がローマ字によって表記されるべきである。たとえば、欧米に主体者が移動するときには、英語が公用語である国には英語、ドイツ語が公用語である国にはドイツ語、フランス語が公用語である国にはフランス語、おなじようにスペイン語、イタリア語、北欧・中歐・東欧のそれぞれの言語において表記されるべきである。このように理想的には、日本語を「その国で使われている公用語でなるべく忠実に再現される表記方法」を用いて、日本の様々な名称が表記されるべきである。

もちろん、そのような多様性に対応するのが困難な場合は、最大公約数的に英語が国際的な標準になっている現状において、英語の表記方法に従って、日本の名称が表記されるべきであると考えられる。これは、日本に来る海外からの人を読んでもらうときにも同じことが言える。

そのように考えた場合、ローマ字での表記は、英語での表記に従って日本の名称を表記するのが自然であり、ヘボン博士の方式は、理に適っていると考えられる。米国では廃止されたが、英国では日本語の表記をするための規格⁽⁴⁾がまだ残っており、英語ではこちらに基づくべきであろう。

ISO の国際規格において、日本が訓令式に基づいて提唱した規格⁽⁵⁾がある。これは、ローマ字表記に対して、日本としての見解をまとめたものになるが、ローマ字を使った新たな表記方法を提唱していることになる。すなわち、同じラテン文字を用いているフランス語やドイツ語の立場、あるいは中欧や東欧諸国の立場と似ている。しかしながら、日本の国字としてローマ字が使われていない以上、新たな音声の綴り方を提唱するのは、問題があるのではないだろうか。特に、後に指摘するように、「つ=tu」などの綴りは、ほとんどの欧米圏ではまともな読まれ方がされないような提唱であり、これはその特殊性から海外では通用しないように思える。日本の国字は、ひらがなとカタカナであり、それ

に漢字や数字が加わったものであるのが通念になっている。ローマ字は、それらの国字の翻字であり、補足的な使用法しかない。

訓令式の弊害の一つとして、逆に、外来語を日本語に訳するときの所謂カタカナ表記についても、原語の発音を損なってしまっていることを指摘したい。例えば、「Titan」は、元々「ティタン」あるいは英語読みをすれば「タイタン」であるが、「チタン」と一般的に表記されている。これは訓令式の読み方で英語を読んでしまったことに起因している。そのため、原語における綴りの想起も「chitan」と間違ってしまう。それよりも問題なのは日本人が一般的に「タイタン」と「チタン」（あるいは「チタニウム」）がまったく別の語源から生じた関係のない言葉であるという認識を持ってしまっていることである。

2.2 文法の説明のためのローマ字表記

形態素解析⁶⁾については、日本語の動詞の活用形について、「つ」や「す」で終わるような動詞についての活用を説明する際に、訓令式の方が活用を説明しやすいし、処理がしやすい。たとえば、以下のように形態素に分けて五段活用形を考えると、文法的に説明がしやすい。これが、訓令式の理論的な根拠になっている。

打つ ut-anai ut-imasu ut-u ut-eba ut-ou
貸す kas-anai kas-imasu kas-u kas-eba kas-ou

これは、当然のことながら、日本語のタ行、サ行の分類に基づいて、日本語の文法が構成されてきたのであり、「音声的な系統性」は無視されている。すなわち、日本語のタ行やサ行については、音声的な分類からは同じ行にはならないにも拘わらず、同じ行にまとめて考えてきた歴史があるからで、それが文法を扱う際の形態素の基礎になっているからである。小学校・中学校の教育で、この原理はわかりやすく、文部科学省の指定もあるので、教えられているが、このような状況において、音声学的に中途半端な訓令式を教えることには、教員としても抵抗があるのではないだろうか。もちろん、小学校のどの教科書にもヘボン式についても補足説明されているし、授業でも教えられている。しかしながら、ヘボン式による補足が必要な理由についてはほとんど教えられていないのではないだろうか。形態素の観点から訓令式を用いて文法を説明する際に、そもそも「音素の違いの無視」によってまとめられたタ行やサ行についての観点も教えられて然るべきである。

2.3 ソフトウェアにおいて必要とされるローマ字表記

形態素解析については、現在用意されている形態素解析のソフトウェアのほとんどは、訓令式だけではなく、ヘボン式にも対応している。また、ローマ字かな変換に関して、形態素解析ソフトウェアと同様に、多く

のかな変換ソフトウェアが複数の表記方法について対応している。また、それに加えて、小文字（「あいうえお」など）も含めて、ソフトウェア独自の変換規則を持っている。そのため、表記を統一する必要性はあまり感じられないように思える。

3. ローマ字による表記について

3.1 日本語の音節の音素表記

表1に国際音声字母⁷⁾で表わした五十音の音節の音素表記を示す。ここで示されているように、タ行は、カタカナで表わすと「タ ティ トウ テ ト」という音をまとめたのが音声的には正しい。「ツ」については、この表においては、ドイツ語の「Zug（ツーク：列車）」のように、「ツァ ツィ ツ ツェ ツォ」のツァ行に属するものになっている。「チ」も別の行になっている。日本ではこの区別をせずに、一つの行にまとめてしまっており、それが五十音の音節の基礎になってしまっている。また、「シ」の音についても、サ行に分類されているが、サ行は本来「サ スィ ス セ ソ」が正しい形になっている。「シ」の音は、「シャ シ シュ シェ ショ」の行に属するものである。日本語の場合イ段が口蓋化（舌を持ち上げて子音を発音すること）すると決めているため、表を見れば、イ段が別の行に移っていることがわかる。

表1 五十音の音節の音素による表記 (抜粋)⁸⁾

ア	イ	ウ	エ	オ
a	i	u	e	o
カ		ク	ケ	コ
ka	-	ku	ke	ko
キャ	キ	キュ	キエ	キョ
k'a	k'i	k'u	k'e	k'o
クア	クイ		クエ	クオ
k'a	k'i	-	k'e	k'o
ガ		グ	ゲ	ゴ
ga	-	gu	ge	go
ギャ	ギ	ギュ	ギエ	ギョ
g'a	g'i	g'u	g'e	g'o
グア	グイ		グエ	グオ
g'a	g'i	-	g'e	g'o
サ	スイ	ス	セ	ソ
sa	si	su	se	so
シャ	シ	シュ	シェ	ショ
sa	si	su	se	so
ザ	ズイ	ズ/ヅ	ゼ	ゾ
dza	dzi	dzu	dze	dzo
ジャ/ヂャ	ジ/ヂ	ジュ/ヂュ	ジェ	ジョ/ヂョ
dza	dzi	dzu	dze	dzo
タ	ティ	トウ	テ	ト
ta	ti	tu	te	to
ツァ	ツィ	ツ	ツェ	ツォ
t'a	t'i	tu	t'e	t'o
チャ	チ	チュ	チェ	チョ
t'a	t'i	t'u	t'e	t'o

表1 続き

ダ	ディ	ドウ	デ	ド
da	di	du	de	do
-	-	デュ	-	-
-	-	d'u	-	-
ナ	-	ヌ	ネ	ノ
na	-	nu	ne	no
ニヤ	ニ	ニユ	ニエ	ニョ
n'a	n'i	n'iu	n'ie	n'io
ハ	-	-	ヘ	ホ
ha	-	-	he	ho
ヒヤ	ヒ	ヒユ	ヒエ	ヒョ
ça	çi	çiu	çe	ço
ファ	-	フ	フェ	フォ
fa	-	fu	fe	fo
-	フィ	フユ	-	フョ
-	phi	phiu	-	phio
バ	-	ブ	ベ	ボ
ba	-	bu	be	bo
ビヤ	ビ	ビユ	ビエ	ビョ
b'a	b'i	b'iu	b'ie	b'io
パ	-	プ	ペ	ポ
pa	-	pu	pe	po
ピヤ	ピ	ピユ	ピエ	ピョ
p'a	p'i	p'iu	p'ie	p'io
マ	-	ム	メ	モ
ma	-	mu	me	mo
ミヤ	ミ	ミユ	ミエ	ミョ
m'a	m'i	m'iu	m'ie	m'io
ヤ	-	ユ	イエ	ヨ
ja	-	ju	je	jo
ラ	-	ル	レ	ロ
ra	-	ru	re	ro
リヤ	リ	リユ	リエ	リョ
r'a	r'i	r'iu	r'ie	r'io
ワ	ウイ	-	ウエ	ウオ
βa	βi	-	βe	βo
ヴァ	-	ヴ	ヴェ	ヴォ
ba	-	bu	be	bo
-	ヴィ	ヴユ	-	-
-	bi	biu	-	-

このように音素的に分解して考えてみれば、イ段の遷移を是正する場合でも、最大公約数的にローマ字を英語で表記する前提においては、ヘボン式の方が妥当で音声的にも理に適っているように見受けられる。即ち、訓令式の「ti」と「tu」は、日本以外の国では、英語圏だけに拘わらず海外では一般に、「テイ」と「トゥ」あるいは「チュ」と読まれることがほとんどであり、同じように「si」は日本人には聞き取りにくいかも知れないが「スイ」と読まれることが多い。その他、訓令式やヘボン式での差異が出てくる音節についての表記の違いを表2にまとめた。

3.2 英語におけるローマ字表記について

英語の基本の母音は、ラテン語の母音に準じている。

しかしながら、たとえば、「利根」などをローマ字で表わすと「tone」になるが、これは、「トーン」と発音されてしまう。これは、英語史⁹⁾を紐解けば、10世紀ぐらいまでに語末の「e」がフランス語と同様に発音されなくなってしまうことによる。この場合には、フランス語と同様に、アクセントをつけて「toné」にした方がきちんと発音してもらえらるだろう。また、11世紀から14世紀ぐらいまでに母音の読みが変わってしまうGVS (Great Vowel Shift) が起こってしまったため、純然たるラテン語読みから英語がずれてしまっている。例えば「kino」という綴りに対して、「キノ」と読むこともあるし、GVSの影響で「カイン」と読むこともある。「ooi」などは、GVSの影響から、「ウーイ」と読まれるだろう。元々の英単語の綴りにおいても、「child: チャイルド」と「children: チルドレン」の2通りの発音方法が存在する。このように同じ綴りに対して、読みが2通り以上あるのが、英語の大きな問題点と言えるだろう。ヘボン博士のローマ字の表記は、ラテン語の読み、即ちGVSが起る前の純然たる古英語の読みを基本にして設計されている。英語自体の正書法に問題があるとしても、国際的な共通言語として射影するときには、特に母音に関しては、ラテン語を基本とした正書法に準拠すべきであろう。

表2 ローマ字の各方式での綴りの差異 (抜粋)¹⁾

かな	訓令式	ISO 3609	BS 4812	旅券申請	道路標識	駅名票
し	si	si	shi	shi	shi	shi
ち	ti	ti	chi	chi	chi	chi
つ	tu	tu	tsu	tsu	tsu	tsu
ふ	hu	hu	fu	fu	fu	fu
じ	zi	zi	ji	ji	ji	ji
ぢ	zi	zi	ji	ji	ji	ji
おう	ô	ô	ō	o	o	ō
おお	ô	ô	ō	o/oo	o	ō
んあ	n'a	n'a	n'a	na	n-a	n-a
んぼ	nba	nba	nba	mba	nba	mba
っち	t'ti	t'ti	t'chi	t'chi	t'chi	t'chi

※「んあ」は、「ん」+母音字の一例、また「んぼ」は、「ん」+ (マ行・バ行・パ行) の一例を指す

3.3 他の欧米語での表記について

日本語のラテン文字による翻字が行なわれたのは、ポルトガルの宣教師によるものが最も初期にあたり、現在も原典が翻訳されて残っている。このロドリゲスによる『日本語小文典』¹⁰⁾が17世紀における日本語の状態を良く表わしているが、ここでは五十音のポルトガル語でのアルファベットによる表記がなされている。その主要部分を表3に示す。この表記においても、サ行やタ行に関しての捉え方が、日本人よりも精緻に捉えていることがわかる。

現在、スペイン語も国際的な標準的な言語になりつつあるので、スペイン語の表記についても考える必要がある。フランス語については、会津洋の論考¹¹⁾を参

考にされたい。

表3 ロドリゲスによるポルトガル語でのローマ字

A	あ	Y	い	V	う	Ye	ゑ	Vo	を
Ca	か	Ki	き	Cu	く	Ke	け	Co	こ
Sa	さ	Xi	し	Su	す	Xe	せ	So	そ
Ta	た	Chi	ち	Tçu	つ	Te	て	To	と
Na	な	Ni	に	Nu	ぬ	Ne	ね	No	の
Fa	は	Fi	ひ	Fu	ふ	Fe	へ	Fo	ほ
Ma	ま	Mi	み	Mu	む	Me	め	Mo	も
Ya	や	Y	ゐ	Yu	ゆ	Ye	え	Yo	よ
Ra	ら	Ri	り	Ru	る	Re	れ	Ro	ろ
Va	わ	Y	い	V	う	Ye	え	Vo	お

3.4 ヘボン式の発展

現在は、拡張ヘボン式⁽¹¹⁾⁽¹³⁾が幾つか提唱されている。これは、ローマ字かな変換入力時代の要請に対応して、ヘボン式の綴り方にさらに、外来語の表記が原語に近づけるように拡張されたカタカナ表記をローマ字入力としてサポートするための拡張がされたものになっている。個人的にはローマ字かな入力に関しては、訓令式でもヘボン式でもどちらも遜色はないように感じているが、訓令式ではこのような提唱がされていないことを考えれば、現在のローマ字表記の主力は、ヘボン式に重点が置かれているように思われる。

4. おわりに

日本語を表記するための国字としてローマ字を「かな」に替わるものとして採用するのでない限り、日本の名称の表記は、海外のその現地でのラテン文字での表記方法に基づくべきであると考えられる。その最大公約数として英語が国際標準語で採用されるのであれば、英語での表記に準拠すべきである。

現在、国際規格として訓令式のローマ字で翻字方法が規定されているが、これは日本による新たなラテン文字を用いた言語の正書法であり、これが海外において一般的に受け入れられるのには、日本語の国字としてローマ字が表音文字として採用され、対外的にアピールされるようなことがない限り難しいのではないかと考えられる。ラテン文字を基本としてその拡張文字を採用している中欧や東欧の言語と同列には並べられないだろう。アジアでも、中国の拼音のように表音文字としてラテン文字を正式に採用されるのであれば、それを国字として海外に提唱しても良いだろう。しかしながら、日本語の表音文字は、音節文字である「ひらがな」と「カタカナ」であり、それが国字であるというのが一般通念になっている。ローマ字教育においては、基本的には日本の名称などの表記を英語で行なうことに限定するべきであると思う。

ただし、形態素解析においては、歴史的に「イ段」が口蓋化された経緯も考えれば、訓令式で考えた方が原

理的にわかりやすいだろう。そのような意味で、国語の文法教育においては訓令式を使っても良いだろう。しかし、そこでは必ず音声的な問題点に対する注意を学習者に喚起しなければならない。コンピュータにおけるローマ字かな変換入力については、ソフトウェアの方で表記の揺れを吸収すべきであり、拡張ヘボン式のような入力方法についても積極的にサポートし、普及させて行くべきではないかと考える次第である。

なお、この論文を書くに当たっては、日本語 Wikipedia の「ローマ字」の項⁽¹⁾と海津知緒氏の「ローマ字資料室」⁽¹⁴⁾をポータルサイトとして参考にさせて戴いた。関係諸氏に御礼を申し上げたい。

参考文献

- (1) Wikipedia: “ローマ字,” <http://ja.wikipedia.org/wiki/ローマ字> (2013).
- (2) 吉田茂: “内閣告示第一号 ローマ字のつづり方,” 官報 第 8382 号(1954 年 12 月 9 日), <http://www.halcat.com/roomazi/doc/koks291209.html> (1954).
- (3) J. C. Hepburn: “A Japanese and English Dictionary; with an English and Japanese index (和英語林集成),” American Presbyterian Mission Press, <http://www.halcat.com/roomazi/doc/hep1.html> (1867).
- (4) BS 4812: 1972: “Specification for the Romanization of Japanese,” British Standards Institution, <http://shop.bsigroup.com/ProductDetail/?pid=00000000000010538> (1972).
- (5) ISO 3609:1989: “Romanization of Japanese (kana script),” http://www.iso.org/iso/iso_catalogue/catalogue_tc/catalogue_detail.htm?csnumber=9029 (1989).
- (6) Wikipedia: “形態素解析,” <http://ja.wikipedia.org/wiki/形態素解析> (2013).
- (7) Internal Phonetic Association: “Internal Phonetic Alphabet: IPA,” <http://www.langsci.ucl.ac.uk/ipa/ipachart.html> (2005).
- (8) 高杉親知: “音素の最前線,” 高杉親知の日本語内省記, <http://www.sf.aimet.ne.jp/ts/language/phoneme.html> (2002).
- (9) 宇賀治正朋: “英語史,” 現代の英語学シリーズ 8, pp. 126-163, 開拓社 (2005).
- (10) ロドリゲス: “日本語小文典,” 岩波文庫 青 681, pp. 50-51, 岩波書店 (1993).
- (11) 会津洋: “フランス語の日本語への干渉-音声の面において-,” 講座日本語教育 Vol 6., pp. 101-109, 早稲田大学語学教育研究所, <http://dspace.wul.waseda.ac.jp/dspace/handle/2065/3137> (1970).
- (12) 上西俊雄: “拡張ヘボン式の提唱,” <http://www.halcat.com/roomazi/doc/KakutyoubuHebonSiki/rohmazhi.pdf> (2003).
- (13) M. Satou: “A Proposal for Romanization of Japanese extending Hepburn System,” <http://homepage3.nifty.com/jgrammar/romanize/romanize.htm> (2012).
- (14) 海津知緒: “ローマ字資料室,” <http://www.halcat.com/roomazi/doc/index.html> (2013).